

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	安岡 直
主 論 文 題 名：初期ルカーチにおける思想形成：『歴史と階級意識』への道 —革命的急進主義とその限界—			
<p>(内容の要旨)</p> <p>1、論文の目的</p> <p>本稿が目的とするのは、第一次世界大戦末期からハンガリー革命を経て、初期思想の到達点である『歴史と階級意識』に至るルカーチの思想形成過程を、各々の時代状況との連関のなかで再構成することを目指している。</p> <p>ルカーチの思想は、常に彼が置かれた時代状況と密接に結びついて形成されてきた。たとえば、『魂と形式』や『小説の理論』といった彼がマルクス主義者になる以前の著作は、後進性に囚われたハンガリー王国を思想的に超出しようとする抽象的で理想主義的な思想を表しており、『歴史と階級意識』はウィーン亡命期において、ハンガリー共産党内部でのクンとの対立あるいはコミンテルンによる「攻勢戦術」の否定を契機として生まれてきたものであった。ルカーチの思想は、けっしてアカデミックな領域での学問的論争を通じて形成されたものではなく、彼の具体的な経験を通して形成されたものだった。およそ、思想・哲学は時代状況との緊張関係の中で形成されたものであってみれば、思想史のアプローチは特筆すべきものではないにしても、ルカーチの場合とりわけそれが不可欠だと言えるだろう。</p> <p>むしろ、これまでのルカーチに研究にこうした思想的アプローチが欠けていたわけではない。とりわけマルクス主義者へ転向するハンガリー革命以前のルカーチを対象とした思想史研究はきわめて充実している。これに対して、ハンガリー革命以降のルカーチに関する思想史研究は比較的手薄である。本稿はおもにハンガリー革命期、およびハンガリー革命政権瓦解後のウィーン亡命期のルカーチに焦点を当てることで、こうした従来の研究の不備を補おうとするものである。</p> <p>たとえば、ルカーチの革命論が持っていた観念性あるいは抽象的理想主義の起源を、これまでの研究はもっぱら『小説の理論』に代表されるルカーチの思想的前史に求めてきた。だが、なるほど観念性の起源がマルクス主義者となる以前のルカーチの思想に起源があるのは間違いないにしても、その点にのみルカーチの革命論が抱えていた問題性を見るならば、事態を正確に捉えたことにはならない。というのも、ルカーチの革命論をその生成現場であるハンガリー革命という</p>			

文脈の中に置いてみる時、それはたしかに「ハンガリー社会」の実態から乖離したものではあったが、必ずしも「ハンガリー革命」から乖離したものではなかったことが明らかにされるからである。つまり、ルカーチは現実からかけ離れたところで革命を思念したのではなく、革命的実践の只中であって現実に向かいながら、なおかつ観念的と言わざるをえない革命論にしか辿り着くことが出来なかったのだ。それはとりもなおさず、ルカーチが理論化しようとした対象、ハンガリー革命そのものが極度に観念的なものだったからである。

ハンガリーで生じた社会主義革命の運動には、ルカーチがマルクス主義者となる以前に抱いていたメシアニズムとの類縁性があり、ルカーチはいわばハンガリー革命を潜り抜けることで、自らのメシアニズムを社会主義革命の理論として再獲得していった。これによってルカーチは、資本主義的生産様式を核として形成される近代社会の秩序、「鋼鉄の檻」からの脱出の時を、いつ訪れるとも分からぬ救済として待望するメシアニズムに別れを告げ、「理論」はついに「実践」と統一されるはずであった。しかし、この再獲得の過程においても、ハンガリー革命自体に「理論」と「実践」との断絶が本質的要素として内包されていたがゆえに、ルカーチはその断絶として表出する観念性を克服することが、やはり出来なかったのである。

この点を見落としてしまうと、その後のルカーチの思想的展開を理解することが困難になる。なぜなら、それ以降のルカーチの思想的歩みは、まさに社会主義政権の樹立と崩壊の中で形成された「革命」という理念が抱える問題性との格闘だったといっても過言ではないからである。

ところが、ハンガリー革命挫折後、ウィーンに亡命したルカーチが自らの過去から訣別していかこうとするその思想的発展を捉えることに成功した研究は多くない。すなわち、従来の研究の多くは、ハンガリー革命のただ中で発表された『戦術と倫理』（1919年）とウィーン亡命期に出版された『歴史と階級意識』（1923年）までを初期思想として一括りにしており、そこに重大な変化が生じたとは考えていないのである。思想的変遷過程を見ないがゆえに、その原因を究明することもあまりなかったのだ。

『歴史と階級意識』を『戦術と倫理』の継続とする解釈は、一見するとそう不自然なものではない。実際、いくつかの重要なアイディア、たとえばヘーゲルの主体=実体論を基礎とする革命論の構想は、『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』にかけて一貫している。また『歴史と階級意識』には『戦術と倫理』に収録されている「正統的マルクス主義とは何か」が再録されていることを考えれば、『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』までを初期思想として一括りにするのはむしろ当然のように見える。

こうした観点から見れば、『歴史と階級意識』を「大戦末期以降の私の発展期の総括的決算」するルカーチの位置づけは、1919年に始まるマルクス主義者としての思想を整理しまとめたもの、という意味になるだろう。もし『歴史と階級意識』が基本的に『戦術と倫理』の続きであるとす

るならば、われわれはこの間の事情を思想的に解明する大きな必要性を持たないことになる。

しかしながら、『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』にかけての思想は、けっして一括りにして初期思想としてまとめることなど出来るものではないのである。1919年のウィーン亡命から1923年の『歴史と階級意識』へ至る道程は、ルカーチがハンガリー革命のなかで形成した革命論の問題性と向き合い、より現実的な社会変革の理論を形成する自覚的な営為であった。『歴史と階級意識』が「大戦末期以降の私の発展期の総括的決算」であるのは、むしろこの意味においてなのである。

したがって、『歴史と階級意識』へと結実していくルカーチの思想的歩み、すなわちルカーチが当時どのような状況下で、いかなる困難に直面し、何を課題としていたのかを明らかにする作業は、同著を理解するための必須の手続きであろう。本稿は、古い自己から脱却していこうとするウィーン亡命期における「内的な危機的過渡期」の実相を明らかにし、同著理解のためのあらたな解釈視座の提示を目指している。

2. 論文の構成

以上のような観点から、本稿は以下のような構成を採る。

第1章では、世紀末ハンガリーの息の詰まりそうな後進性に反発し、ルカーチがそこから脱出するために、思想的超出という道を選び、そのため抽象的でロマン主義的な現実破壊的志向を持った思想を形成していった経緯を明らかにする。オーストリア・ハンガリー二重帝国下のハンガリーは、西欧先進国に追い付こうと急速な経済的近代化を遂げていたが、政治的・社会的には古い封建体制を温存させていた。ルカーチはこの封建的なハンガリーにおいて、経済的には重要なファクターではあったが政治的には無力な新興ブルジョワ・ユダヤ人家庭に育つ。典型的な新興ブルジョワジーの第二世代に属するルカーチは、知識・教養の点で近代化を果たしたがゆえに、一層ハンガリーの公的生活全般に対して反感を抱くようになる。しかし、現状を変革することの出来ない苛立ちから、ルカーチはやがて現実に背を向け、精神的にも現実的にもハンガリーを後にし、ドイツにおいて文学・哲学・美学の研究に没頭していった。だが、第一次世界大戦の勃発とともに、ドイツもまた自らにとって安住の地ではないことを悟ったルカーチは、絶望のなかでマルクス主義者となる以前の代表作、『小説の理論』を執筆する。そこで表現されたのは、一切の現実性を欠いた、現状破壊的で理想主義的な「新たな世界」への待望であった。

第2章では、この抽象的な理想論が、ハンガリー革命のなかでどのように革命論へと転換していったのかを辿っていく。それまで現実政治には無関心であったルカーチは、第一次世界大戦末期、カーロイによるハンガリーの市民革命に対しても特別な反応を示すことはなかった。しかし

大戦中ロシアで捕虜となり、ロシア革命の洗礼を受けハンガリーで社会主義革命を起こそうと帰国した人々との接触のなかで、ルカーチは共産党への入党を決意し革命へと身を投じていく。だが、政治的経験を一切持たず、マルクス主義者となる以前の思想を頼りに構成されたルカーチの革命期の思想は、むしろ観念的なものに留まらざるをえなかった。この点については、従来の多くのルカーチ研究が指摘している通りである。

しかし、第2章ではルカーチの革命論の観念性が、かならずしも彼の抽象的な理想主義にのみ由来するものではなかったことを明らかにする。ルカーチの革命論は確かに観念的なものであったが、彼が理論化しようとしたハンガリー革命自体も、極端に抽象的理念によって導かれた現実性を持たないものだったのである。ハンガリー革命を指導したのは、ロシア革命の洗礼を受けて帰還した、ベーラ・クンを筆頭とするレーニン崇拝者たちであった。彼らはハンガリーの現状を顧みることなく、ロシア革命の忠実な再現をハンガリーで果たそうとしたのである。

したがって、ルカーチの革命期の思想をハンガリー革命の中に置き入れて評価する時、浮き彫りにされるのはルカーチの革命論の「観念性」であると同時に、ハンガリー革命の、そしてハンガリー革命がロシアの10月クーデタ（10月革命）の再現を目指したことを考えれば、およそ革命的社会主義の「観念性」に他ならない。『小説の理論』の抽象的理想主義はハンガリー革命という現実を潜り抜けても、本質的に現実性を帯びることはなく、観念的革命論へと変貌を遂げただけであった。革命政権瓦解後、ウィーンでの亡命生活のなかでルカーチが向き合わねばならなかったのは革命主義のこの観念性だったのである。

第3章では、ハンガリー革命挫折後、ウィーンに亡命したルカーチが党の指導者として徐々に成長し、ハンガリーでの闘争を現実準拠して指導することの重要性を認識する中で、抽象的な理想主義と具体的な現実主義との相克に直面し、観念的革命論から脱却していく過程を描く。

ルカーチの内に現実主義というあらたな志向が芽生えていったのは、ハンガリー革命の中心的指導者であったがゆえに、一層観念的革命論から脱却できなかつたクンとの対立を契機としている。革命政権崩壊後のハンガリーにおいて、あくまでプロレタリア独裁の再現を目指そうとするクン派に対して、ルカーチは社会民主党・労働組合勢力との共闘に活路を見出そうとするランドラー派に属し、漸次的な民主主義的改革を目標として立てていくのである。ルカーチからすれば、クンはハンガリーの現状を顧慮することなく、現実との媒介を持たない抽象的目標を掲げる「冒険主義者」であった。ハンガリー共産党の指導者として成長を遂げたルカーチは、すでに革命時の観念的革命論を越えていたのである。

しかしながら、クンとの対立しつつも、ルカーチの中には依然としてクンと同じ観念的革命論が存在していた。ハンガリーの闘争では現実主義的な志向を示していながら、ルカーチは「攻勢戦術」と呼ばれる急進主義を掲げる熱烈な世界革命論者でもあった。「攻勢戦術」は、明らかに

ハンガリー革命時の観念的革命論の継続である。したがって、この時期のルカーチには、両立しがたいふたつの志向が併存していたと言える。

ルカーチの中のこうした自己矛盾を表面化させたのが、1921年中部ドイツで生じ大敗北を喫した武装蜂起「三月行動」、さらには同年6月から7月に開催され「三月構想」の総括が行われたコミンテルン第3回大会だった。第3回大会において「三月行動」の急進主義は否定され、コミンテルンの掲げる闘争方針は「攻勢戦術」から「統一戦線戦術」へと転換されていくのであるが、ルカーチは第三回大会後も「攻勢戦術」を捨てきれないでいた。しかし、「攻勢戦術」の理念を実行に移した「三月行動」を陰で指導していたのは、ルカーチが対立を深めていたクンだったのである。ルカーチの自己矛盾はこれによって臨界点に達していく。

こうした中でルカーチはコミンテルン第三回大会後、あらためてハンガリーの政治的現実に向き合って「攻勢戦術」を捉え直し、そこからの脱却を目指していった。『歴史と階級意識』は、ルカーチが「危機的な内的過渡期」と呼ぶこの熟考の期間を経て上梓された著作である。それは、ハンガリー革命以来の古い自己を乗り越えて行こうとする、ルカーチの理論的努力の成果であった。

したがって『歴史と階級意識』は、けっしてハンガリー革命以降のルカーチの思想をたんに総括したものではない。だが、従来の研究は、革命期の『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』を初期思想として一括りにし、『歴史と階級意識』におけるルカーチの思想的発展について十分な注意を払ってこなかった。なるほど、『歴史と階級意識』には『戦術と倫理』に収録されている「正統的マルクス主義とは何か」が再録されているため、一見すると『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』を一括りにすることも可能であるようにも見える。ただし、同論文は『歴史と階級意識』再録に際して根底的な加筆修正が行われており、そもそも同一の論文であるとは言い難い。また、ウィーン亡命期、ルカーチは政治的現実へと向き合う中で大きな思想的発展を遂げ、『歴史と階級意識』においてそれを表現しようとしたのである。『歴史と階級意識』はけっしてルカーチがマルクス主義者となって以降の思想をたんにまとめたものではなかった。

第4章では、前章で明らかにされた『歴史と階級意識』の形成過程を踏まえて、これまでもっとも誤読されることの多かった「組織問題的方法的考察」の解釈を試みている。ルカーチはクンとの闘争の中で、その「冒険主義」的政策に加えて、独裁的な彼の党運営に対する批判を強めていた。後にルカーチが述べているところによれば、『歴史と階級意識』には「ブルム・テーゼ」において明確化される民主主義への志向が潜在的に存在していた。だが、革命への熱望を抱いていたルカーチは、レーニンの前衛党主義を是とし、これに準拠するセクト主義の志向を捨てきれなかったのである。したがって同論は、民主的志向とセクト主義的志向との間に発生する緊張関係によって特徴づけられる。

「組織問題の方法的考察」においてルカーチは、このふたつの志向を結び付け理論化しようとしているが、整合性のある理論が提示されているとは言い難い。ルカーチは最終的にはセクト主義に傾いている。とは言え、同論はけっして共産党独裁の理論ではない。だが「内的な危機的渡期」において、クンの独裁的な党運営に対して、ルカーチが反セクト主義、民主主義的志向へと傾いていった経緯を掴むことなく同論を論ずる多くの研究は、そこに孕まれている緊張関係を見落とし同論のセクト主義的志向にのみ着目してそこにスターリニズムの萌芽さえ見出している。ルカーチ自身、『歴史と階級意識』においてセクト主義が払拭されていなかったことを認めているが、彼によればそれはスターリンの保守的セクト主義とはもっとも遠いものであった。

ルカーチが提示した党理論は、党の全体意志を党員と党指導部の相互作用において生まれてくるものとして位置づけ、党の全体意志を党員にとって自己のものへと変換し、党への服従を自己への服従にすることで連帯的自由を実現した集中制の理論である。ルカーチはここで、党員の党指導部に対する「盲目的服従」を明確に否定している。

当時ルカーチは、直接的な行動を通じて革命的階級意識を覚醒させようとする「攻勢戦術」を捨て、あらたな革命論を模索していた。その中でルカーチが革命的階級意識獲得の媒介として考えたのが党における実践である。ルカーチは党における諸活動を通じて、党員たちが階級意識を獲得することを理論化しようとしていたのであった。だからこそ、ルカーチにとって党員による党指導部への「盲目的服従」は拒否されねばならなかったのである。自立的意志を喪失して党指導部に従うことが党活動であるならば、それはけっして革命的階級意識の獲得には繋がらないと考えたのである。

しかしながら、ルカーチはこうした反セクト主義的な党理論の形成を一貫した形で構成することは出来なかった。ルカーチは、党の意志の中核に位置する「階級意識」を、党員自身の意志形成過程に基礎づけることが出来ず、理論的に先取りされたものとして構想しその理論知を共産党に委ねてしまったため、共産党は最後まで労働者大衆に対する指導者としての前衛党という位置づけを保持していたのである。

第5章は、『歴史と階級意識』の中心論文である「物化とプロレタリアートの意識」の理論分析を行っている。これまで「物化とプロレタリアートの意識」は、「組織問題の方法的考察」と分断されて論じられることが多かったが、本章では「物化とプロレタリアートの意識」が「組織問題の方法的考察」において十分な理論的基礎づけを欠いていた「階級意識」を具体的に明確化し、同論を補完するために書かれたという観点から「物化とプロレタリアートの意識」を解釈している。ルカーチは「組織問題の方法的考察」において最終的に支持した前衛党の役割を基礎づけるために、「正しい階級意識」の理論を必要としていたのだった。前衛党が前衛党足りうるのは、それが「正しい階級意識」を洞察しているかぎりのことである。

この「正しい階級意識」の理論は、ルカーチが革命を現実のうちに定位させようとする理論的
努力の頂点をなすものであり、『戦術と倫理』にはじまる彼の発展過程の「総括的決算」の名に
ふさわしいものであった。ルカーチは「物化とプロレタリアートの意識」において、それまで抽
象的な精神の自己運動として捉えられてきた、彼にとっての革命の基礎理論であるヘーゲルの主
体＝実体論に、「物化論」を経ることで現実的基盤を与え、主体が客体世界を自己のものとして
取り戻すという戦略を具体化することに一定程度成功しているといつてよい。

ルカーチにとって革命とは、主体に対して疎遠なものとなり、自立的運動を開始した客体世界
を主体として取り戻すことを意味していた。「物化論」はこの客体世界の自立化に理論的な裏付
けを与えると同時に、この自立化が仮象であることを暴露するものである。ルカーチはマルクス
の『資本論』における「商品の物神的性格とその秘密」を手掛かりに、固定化した物的相のもと
に現れる客体世界の本質をなすのは人間同士の社会関係であることを明らかにする。ルカーチに
よれば、社会関係とは「対象性形式」を媒介として過程的に生産、再生産される主体と客体との
間の相互作用の過程であった。

ルカーチによれば、このことを洞察出来るのは、さしあたりその社会的生存条件によってプロ
レタリアートだけであるという。ルカーチはいう。プロレタリアートは、現実に対する適切な客
観的意識を持つことが出来る唯一の社会的存在であると。ところでこの意識は、たんに社会的現
実を対象とするひとつの意識ではない。ルカーチの主張では、社会的現実の真実を捉えた意識は、
社会が主体によって産出されたものであると同時に、主体もまた社会によって規定されたもの
であることを知る意識である。この過程的現実としての客観的意識にたどり着いた主体にとって、
その認識はたんなる認識であることをこえて、客体世界を実際に変革するものとなるのであ
った。

ルカーチが「物化とプロレタリアートの意識」において獲得したこうした理論的視座は、多く
の場合、たんなる観念論あるいは主意主義であるとして批判されてきた。ルカーチ自身、後に行
った『歴史と階級意識』批判において、「物化とプロレタリアートの意識」の理論は「観念論的
構成物」だったと批判的に述懐している。

もちろん、認識が認識された客体の変化を引き起こすという主張は、文字通りに受けとめれば
神秘主義にさえ聞こえるだろう。だが「物化とプロレタリアートの意識」においてルカーチは、
この主張に現実的な基盤を与え、理論と実践を統一する実践的社会意識論の構築を目指したの
であった。たとえば「労働力商品としての自己」に対して自覚的となり、「労働力商品」が労働力
の抽象化、その抽象化に基づく量化、そして量化に依拠する合理的生産体制への編入といった「多
面的な媒介」の結果として生み出されたものだということを認識した労働者大衆は、この段階で
もはや元の自分ではない。自らの出自を自覚した労働者大衆は、自己のもとに安らいでいること

ができなくなっているのである。自己に関する直接性を脱した労働者大衆は、「労働力商品」としての自己との緊張関係に置かれ、自己を規定していた構造の改変へと動機づけられる。だからこそルカーチは労働者が自らを商品として認識することは、認識としてすでに実践的であり、この認識は認識の客体に対象的、構造的変化をもたらすと主張していたのである。主体＝実体論のもつ実践的性格は、それが意識に対峙している対象についての意識ではなく、対象の自己意識であるがゆえに、意識化の活動はその客体の対象性形式を変革するという点にあった。

こうした主体と客体、理論と実践、生成と歴史の相互作用こそが、主体＝実体論の強みであり、ルカーチはこの力によって静観的二元論を超えようとしていたのである。したがって、ルカーチが主体＝実体論に依拠するかぎり、認識の力はけっして無力な純粹認識ではありえない。

「黒人」の「奴隷」からの解放が可能となるのは、「奴隷」という「対象性形式」が生まれてくる社会関係を洞察し、われわれがその「対象性形式」を変換することによってである。もちろん、認識がただちに現実の変化を引き起こすわけではない。われわれは、それぞれの利害関心に縛られ自己に都合のよい「対象性形式」に固執する。しかしながら、ルカーチが提示する主体＝実体論は、われわれに自らが「社会的存在」であることを理解させつつ、われわれ自身が作り出した社会構造を客観的に認識させようとするものであった。そして、その客観的で具体的な社会認識が、われわれに現存社会に内包される深刻な不合理さ、歪みを示唆する時、われわれは現状に安らいでいた元のわれわれではなく、現実との緊張関係に置かれたわれわれへと変貌している。

それゆえ、「物化とプロレタリアートの意識」の中核的思想を素直に受けとめれば、様々な観念的要素を内包しつつもそれが指し示しているのは、人々を社会的存在としての意識へと導き、この意識の力で社会変革を引き起こすことであろう。ところがこの社会変革において、ルカーチは歴史的総体によって指示されるどころの発展過程の客観的必然性を持ち出して、その方向性を革命的実践へと固定化してしまうのである。

革命的焦燥に取りつかれていた当時のルカーチは、あまりにも性急に革命の必然性を引き出そうとし、そして合理的議論のもつ漸次的変革の力に対して懐疑的であった。このことは労働者大衆に対してさえあてはまる。もし、合理的議論によって労働者大衆を正しい社会意識へと導くことができるのであれば、「目前の利益」に縛られている彼らをそこから引き剥がすために、「組織問題の方法的考察」で主張されていた「多くの苦しい経験」は必要ない。労働者大衆がその「物化された意識」のために根本的にブルジョワ的思考に囚われ、資本主義的現実を変更不可能と見做していたとしても、認識の努力によってそこから脱していくことは可能である。実際、「物化とプロレタリアートの意識」において、ルカーチはまさにそのための議論を展開したのではなかったか。もしそうでなければ、ルカーチは一体誰にむけて何のために議論を展開しているのか分からなくなってしまう。

おそらく、『歴史と階級意識』においてルカーチはそれと意図せぬまま、社会変革に関するふたつの道筋を示していた。「物化とプロレタリアートの意識」における社会意識論的な啓蒙的道程と、「組織問題の方法的考察」における「多くの苦しい経験」を伴う政治的な実践的道程である。したがってルカーチは、「正しい階級意識」の理論を導出するという「物化とプロレタリアートの意識」の試みによって、結果的に「組織問題の方法的考察」との齟齬を生み出してしまったと言えるだろう。「物化とプロレタリアートの意識」が指し示しているのは、人々を社会的存在としての正しい社会意識へと導き、この意識の力で社会変革を引き起こすことであった。その場合、「組織問題の方法的考察」で提示された前衛党の強力な指導は不要であるばかりか、むしろその障害となる。「組織問題の方法的考察」と「物化とプロレタリアートの意識」は、『歴史と階級意識』のためのふたつの書き下ろし論文であり、ルカーチが同著における「決定的に重要な研究」と呼んだものであるが、セクト主義的立場を持つ前者と潜在的には民主主義的改革の可能性を孕んだ後者との間には、両立し難い対立が存在していた。

しかしルカーチは結局、実践的認識たる主体＝実体論的視座を犠牲にしても、革命への熱望のためにレーニンの前衛党論が主張する独裁的な党の指導性を支持したのだった。革命への熱狂から目を覚まし、現実によりそった民主主義的改革の重要性をルカーチが認識するようになるのは、『歴史と階級意識』出版からさらに数年後のことである。

結論では、『歴史と階級意識』以降のルカーチの歩みを概観している。ルカーチは、『歴史と階級意識』出版後も、上記二つの志向を曖昧に併存させていた。同著出版後に発表した「レーニン論」は「組織問題の方法的考察」の継続であり、前衛党主義を明確に打ち出している。そこには「組織問題の方法的考察」に内在していたふたつの方向性の相克すら見られない。だが、ルカーチにおいて反セクト主義、民主主義的改革の志向が消え去ったわけではない。「モーゼス・ヘスと観念的弁証法の諸問題」においてルカーチは、ヘーゲル哲学のリアリズムに着目し「物象化とプロレタリアートの意識」における現実主義的な改革志向を発展させている。

ランドラーの死去により同派を文字通り導くことになったルカーチは、よりハンガリーの現実に密着する中で、プロレタリア革命とブルジョワ民主主義革命は相互に陰しく分離したものではないとしてドクマティックな革命の公式を捨て、柔軟に民主主義的改革のための闘争を党の役割として打ち出していくようになる。その成果が1929年に発表される「ブルム・テーゼ」に他ならない。この段階で、ルカーチはもはや歴史過程の客観的必然性を訴えることはなかった。それと同時にルカーチは、歴史過程の客観的必然性を背景にその独裁的指導性を発揮する前衛党の理念も捨て去ったと言える。彼は『歴史と階級意識』に内包されていた民主主義的改革志向を顕在化させ、セクト主義の完全な払拭に成功したのである。ルカーチが『歴史と階級意識』をより大きな明確性へ向けての過渡期の思想であったと述べているのは、この意味においてであった。

しかしながら、「ブルム・テーゼ」は政治的闘争方針の綱領であり、そこにおいてルカーチは「組織問題の方法的考察」に対する理論的な総括を行っているわけではない。また、「ブルム・テーゼ」が「物象化とプロレタリアートの意識」あるいは「モーゼス・ヘスと観念的弁証法」の着想と繋がりを持つものであるのかどうかについても、はっきりはしない。ルカーチは、『歴史と階級意識』から「ブルム・テーゼ」へと移行していく過程において、『歴史と階級意識』の問題性を総括する理論的著作を残していないのである。これまでの研究においても、『歴史と階級意識』から「ブルム・テーゼ」への移行過程については十分に明らかにされているとは言えない。だが、この問題については今後の研究課題としていきたい。